北総の里

発行日 2018. 6. 29
第 239 号
（第１回発行 1974年４月１日）
発行所　北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが新しくなりました！

施設の概要や理念，利用者の様子，園長からのお知らせ等，盛りだくさん！ぜひアクセスしてみて下さい。

ホームページアドレス
http://www.hokuso-ikuseien.org/

Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp

特集　近藤原理先生から学んだこと

〝共に生きる〟心づくり

原理先生は身長１８０㎝位。骨格がしっかりしていて大柄な体付き。眼鏡ごしの優しい表情が印象的。当初は失礼と思い「近藤先生」と呼んだのだが、何時の間にか「原理先生」「ゲンリ先生」と親しみを込めて呼ぶようになっていた。

原理先生が自宅（なずな寮）で様々な障害を負った大人の方10名前後と40年近く共に暮らした実践録は〝やさしい言葉で深い思想を〟を伝える名著としてこれからこそ長く読み継がれる。その原理先生が昨年12月に亡くなられた（享年87才）。

私と近藤原理先生との出会いは昭和57年の〝なずな合宿研修〟。国見山荘が会場であった。８月８日～10日の２泊３日、全国から集まった１００名以上の仲間は熱心に語り合った。１日目の午前中は〝なずな園〟周辺の田圃やお茶畑の草取り。汗びっしょりになって国見山荘に辿り着き、シャワーを浴びて、さあ研修開始。先ず原理先生の基調の話。約３時間の長丁場、原理先生は〝なずなの日々〟から紡ぎだされる〝優しい言葉で深い思想〟をユーモアを混ぜながら話された。全く飽きない話上手である。９日は長崎原爆の日。原理先生の兄はこの原爆で命を落とされた。「平和なくして福祉なし」。この研修の永遠のテーマである。その後、この〝なずな合宿研修〟は〝なずな園〟の運営と重なりながら継続されていく。〝なずな園〟は２０００（平成12）年に幕を閉じた。なずな合宿研修は２００１（平成13）年39回を重ねて終わる。なずな研修はその後、長崎、沖縄、山口、北海道の仲間に引き継がれた。

千葉県独自の生活ホーム（グループホーム）の制度をつかって、原理先生の〝なずな園〟の真似をして私が自宅を開放して生活ホーム〝武井ホーム〟はじめたのは１９９７（平成９）年のこと。利用者３名と我が家族（私・妻・娘二人）との共同生活の始まりである。「それはできないことですねー」とか「たいへんでしょう」とか、いろんな励ましや心配の声を頂いた。が、兎に角、乗り掛かった舟で歳月は過ぎていった。家族と障害者が同じ屋根の下で暮らす。この間、時々、原理先生の著作に目を通し、また、直接原理先生に教えを頂きながら、ヨロヨロとホームは維持された。この〝武井ホーム〟は足掛け18年続けたが２０１５（平成27）年、これ以上は無理と閉鎖。覚悟の上でこの人たちと暮らしを始めたつもりだが、とても原理先生のような大きな心で毎日の暮らしを見つめることはできなかった。

▲無数のなずなの一点。
千葉なずなホームである武井ホーム。
（1997.4.1オープン，2015.3.31閉鎖）

▲原理先生から“千葉なずなホーム”お墨付きを頂いた。

原理先生の著作「障害者との泣き笑い三十年」を改めて読む。この人たちと共に生きる心を整えるための心の底からの提案だ。

「福祉の神からの提案」という行を少し書き写す。

『障害が重くても同じ人間じゃあないか。ともに生きるべきだ＝そういくら考えても所詮、観念の遊戯にすぎない。やはり障害の重い人と実際にかかわり、実際にひとつひとつ人間であることをたしかめていく作業をやることである。そのなかで、かかわる私どもの障害者に対する差別心や偏見をただし、これまでの見方、考え方を変えていく努力をすることである。だまっていて、見方・考え方は変わらない。直接のふれあいのなかで自分の弱さとたたかいながら努力することである。同じ人間じゃないか＝という認識をたしかに自分のものにするために、そうした過程がぜひ必要なのである。』（武井）

特集

原理先生から学んだこと

この広報紙でも度々触れておりますが、北総育成園では近藤原理先生が発信される様々な教えからたくさんの気づきや学びを得て日々の利用者支援に生かしています。今号では原理先生に直接お目にかかってお話を伺うことができた職員が原理先生との貴重な思い出を言葉にしました。

①副園長　白樫 久子

私が近藤原理先生のお名前を知ったのは、入職して間もない頃、園長のお話の中でした。著書は北総新職員の課題図書としても使わせていただきました。机上の理論でなく、先生がご自宅なずな寮で共に生活する人達とのお話は何度読んでも楽しく、今でも多くの示唆を与えてくださいます。

20代の頃、長崎なずな合宿に参加。腰に手ぬぐいぶら下げた先生が柔和な笑顔で先頭切って作業をされていました。初めてのお茶畑の草取り、国見山荘での研修、夜中までの語り合い、今考えても多くの初対面の方々のお話を伺う貴重な体験でした。また北総30周年記念講演にお越しいただいた時、鯉屋旅館のその晩は、地震が夜中まで続いたことを「貴重な体験だった」と笑顔でお話しされていたことを思い出します。東庄公民館では多くのご来賓が先生の講演に真剣に耳を傾けられていました。

先生の多くの言葉の中でも、私は今改めて「関係性の発達は無限である」の放つ力強さと懐の深さに、いたく魅かれています。かけがえのない人々との数えきれないやり取りの中で編み出されたその言葉は、これから生きていく我々に勇気と希望を与えてくださいます。先生ありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

②支援課長　猪田 昌宏

私は北総に平成10年からお世話になっているのですが、この間原理先生とは3回ほどお会いする機会を頂きました。1度目は北総育成園創立30周年記念式典の時でした。まだ入職して間もない私も参加させてもらい原理先生とお酒を飲ませていただきました。2回目は船橋アリーナでの演劇クラブ「夕鶴」の公演の時。私も演劇クラブの下挺子として参加させていただきました。公演後、控室で原理先生と園長はじめ演劇メンバーとの写真を私が撮らせてもらったことを思い出します。

そして3回目は今から4年前の平成26年7月に鹿町で行われた研修会に園長の御供として参加させてもらった時です。過去2回にお目にかかった時はそんなにお話しする機会もなかったのですが、この時は園長が私のことも紹介してくださり、原理先生も私が村議会や紙工芸を担当していることを北総の里広報紙などを通じ名前を覚えてくれていました。本当に感激したのを今でも覚えています。この時、原理先生はすでにご自分の足で歩くことは難しかったのですが、歩行器をお使いになり研修会にも参加され、約40分に渡る講演では一度も椅子にかけることなくお話してくださいました。夜の懇親会では原理先生のお隣に座られた園長が再度、私を原理先生に紹介してくださり、私が瓶のままビールを飲み干すと「おお、若いのはいいね。これからも頑張ってください。」と笑顔で励ましてくださいました。一足先に原理先生が帰られるということで、車椅子に乗られた原理先生を参加した男性達で担ぎ、私もその中に混ぜてもらい車までお見送りしたことを思い出します。

▲H16.10.7　北総創立30周年記念式典。記念講演の為、長崎から原理先生が千葉に足を運んでくださった。当日の朝、北総の玄関に原理先生が現れた！夢のような瞬間であった。

北総に入職し20年、園長から原理先生の言葉や教え、そしてこの人達との生きたやりとりを沢山教えていただきました。原理先生が残してくださった理念や沢山の言葉を心におきながらこの人達の心に寄り添っていけたら、と思います。

本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

③支援課長　絵鳩 典子

北総に入職し園長始め先輩職員から北総の理念として教えてもらった言葉が「働くこと生きること」、そして「平和なくして福祉なし」でした。「平和なくして福祉なし」と言う言葉がなぜ北総で大切にされているか？その解説で原理先生の存在、なずな園での共生生活、そしてなずな合宿のことを知りました。北総の

職員となって3年目の夏に第36回なずな合宿に参加の機会を頂き、初めて原理先生にお会いしました。武井園長も一緒に参加された為、開口一番「やぁ、武井さん。よく来てくれました！」と原理先生が笑顔で出迎えてくださったことを今でもよく覚えています。その後も沖縄なずな合宿、長崎しかまち研修、山口宇部なずな合宿への参加の機会をいただき、原理先生にお会いし古くからのなずな合宿のお仲間の皆さんの中に混ぜていただきました。原理先生が想う障害者福祉の在り方や、戦争のない平和な世界への願いに強く共感され、その想いを受け継ぎ情熱を持って全国になずなの種を蒔いておられる皆さんとの出会いは、私にとって大きな財産となりました。原理先生が折に触れ「人と人との繋がりが全ての原点」と仰っていた意味が実感としてわかったように思います。

原理先生に教えていただいたことをこれからの自分の仕事に十分生かしていくことが、原理先生への恩返しとなるよう、謙虚さを大切に頑張っていきます。原理先生、本当にありがとうございました。

④支援主任　髙木 恭一

私は平成元年に北総に就職した際、武井副園長（当時）に教えていただき原理先生を知りました。障害者福祉について全くの素人だった私が、原理先生の本を読んで「障害者福祉面白そうだ」と思えたのは、その思想に大きな魅力を感じたからだと思います。「あるがままに当たり前に」「ゆとり・夢・ユーモア」等、この人たちを周りの自然と共に大きく包み、また自分自身も包まれて「共に生きる」、その思想に魅せられました。そして、当時テレビでも放映され、本に書かれていた通りの暮らしを目に焼き付けることができました。

初めて原理先生にお会いしたのは平成6年のなずな合宿でした。原理先生は滑舌良くしゃべる人で、少しイメージと違っていました。そして平成30年の今、私が原理先生を表すならば、「障害者と共に暮らした人の好いおじさん」ではなく、「教師としての使命に生き、弱者をいたわり、障害者と共に生きる日本を作るべく若者たちや社会に強く訴えてきた人」「原爆で兄を失ったことが人生の原点であり、戦争のない社会を作るために戦ってきた人」といった感じだと思います。常に使命感に突き動かされ、「やりたいこと」「語っておきたいこと」があふれるほどあったのが原理先生だと思います。そんな原理先生の思いの最後の所に少しだけ貢献できたことは私の最高の誇りです。

▲山口宇部なずな合宿、夜の懇親会。
原理先生とお話しできるかけがえのないひと時。
H27.9.6

⑤支援主任　青野 豊市

私が近藤原理先生とお会いしたのは、平成27年の宇部なずな研修でのこと。歴史あるなずな研修ということで緊張して参加しました。研修では参加した皆さんの福祉に対する熱い思いに只々圧倒されっぱなしで驚くことばかりでしたが、原理先生の実践記録「ともに生きともに老いる」を見せていただき、あたり前のことを、あたり前に行う大切さを教えていただきました。宇部なずな研修の最後は原理先生の講演。NHKのおはようジャーナル「シリーズ教えるこまやかにそしておおらかに」を見せていただき、映像の中には原理先生が障害者支援について話されている所も流れて、働くこと生きること、まさに今の北総の理念を話されているようでした。これも園長がなずな研修から大切な言葉・理念を持ち帰って北総に応用してくれたからであり、講演を聞いてどこか懐かしい気持ちになりました。講演内容には戦争は決して起こしてはならないという原理先生の強い思いがあり、その思いは自分達が引き継いでいかないといけないと思いました。

⑥支援主任　保科 智子

私が実際に原理先生とお会いしたことは3回。1度目は平成12年に長崎なずな合宿研修に参加した時。原理先生のことは北総で園長のお話等で聞いてはいましたが、どんな方かはあまり知らないまま参加しました。そこでは原理先生のお宅へ行き畑の草取りから始まりました。そして合宿研に参加する中で長崎の原爆についてのお話が多くあり、平和について学んだことが強く残っています。2度目は北総の創立30周年式典にて。実際にお話をし、北総のことや広報紙を読んでの感想を評価してくれていました。原理先生が北総に来てくれての交流は貴重な時間でし

た。3度目は平成27年に沖縄なずな合宿研修でお会いしました。その頃は原理先生も体調が思わしくなく車椅子での参加でしたが、講演を聞き懇親会でお話をすることができました。限られた時間でしたが、原理先生は毎回北総のことを評価してくれ、褒めてくれ、最後に握手を交わしてくれました。

私は北総で研究委員会を担当しています。その中の活動として平和学習があります。北総の平和学習の原点は原理先生の「平和なくして福祉なし」という思いを園長が学び始まったと伺いました。原理先生のユーモアあるお話や思いの中にはいつも平和を願う思いが込められていることを感じてきました。北総で平和学習を続けていくことは原理先生の思いを引き継いでいくことだと思います。その担当として私自身が平和を願い、原理先生の願いを思いながら今後の活動を広げていきたいと思います。

⑦支援主任　菅谷 大輔

私が初めて原理先生にお会いしたのはH28年の3月。園長のお供で原理先生のお宅に椎茸園を作るお手伝いをさせていただいた時だった。入職当時から園長も師と仰ぐ原理先生の言葉を常に意識しながら今日まで北総で仕事をさせてもらってきたが、実際、お会いした時の率直な感想としては、満面の笑みで迎えていただき、全身からやさしさがにじみ出ているようなおじいさんの印象がとても残っている。その年の8月にもコスモス会研修の足で伺った。私達が来るのをとても楽しみにされていたとのことで、朝早くから起きて歓迎の準備をしてくれたとの話を聞き、ここまでの関係を築いてこられた園長の力もさることながら、改めて原理先生にとっての北総育成園への思いの大きさを感じた。

実際お会いした時は体調もすぐれていたとは言えず、移動の際の押し車は離せない状態。それでも、3月の椎茸園作りに参加させてもらい、完成した後にやっとの思いで裏庭まで直接見に来られ涙を流して感謝していただけたことに、原理先生とのお付き合いが浅い自分でも胸を熱くさせられた。北総での作業では味わえない充実感、達成感が得られ本当に良かったと思える瞬間でもあった。

鬼籍に入られてしまいましたが、自分はこれからも「ゆとり、ユーモア、夢」をしっかりもってこの仕事に邁進していきたいと思います。ありがとうございました。

⑧支援員　加瀬 裕一

私が原理先生に会ったのは、平成28年の8月、長崎への研修にて、原理先生の自宅の庭にある、椎茸のほだ木の手入れをする為に訪れた時でした。除草作業と天地返しを終えた後、自宅の座敷に通していただき、少しの時間でしたがお話しすることができました。この日原理先生は体が思うようにならぬ中で朝から北総の4名の来訪を心待ちにしてくださり、張り切っていたそうです。武井園長が尊敬してやまない原理先生に初めてお会いし、心の広さ・優しさを感じました。全国の大勢の方がその思想・取り組みに惹かれ原理先生を慕うのがわかるような気がしました。先生と握手をし、書籍を頂きました。この書籍は今でも自宅の本棚に置き、いつでも読めるようにしてあります。また、帰り際に「暑いから食べてください」とアイスクリームを頂き、千葉から来た職員一行に気を配ってくださいました。原理先生に直接お会いし、「なずな」の前に立ったことの意味をよく噛みしめ、今後の仕事に励みたいです。

原理先生、今後も見守っていてください。ありがとうございました。

▲千葉と長崎コスモス会の仲間9名で120本の椎茸菌打ち終了（全て原理先生宅裏山のクヌギの木）。原理先生は涙を流して喜んでくれた。H28.3.2

⑨支援員　高橋 洋平

近藤原理先生と初めてお会いしたのはH28年沖縄なずな研修に参加させていただいた時でした。体も思うようにいかない状態で、車いすに座りながらではあったが、近藤原理先生より講演を受ける機会を頂いた。「大らかに細やかにさりげなく」「あるがままにあたりまえに」と一見わかりやすい言葉のようですが、考えれば考えるほど奥が深い。それこそが障害者福祉の原点であると感じました。講演の中で「つながり」の大切さについてお話がありました。千葉県民の私が沖縄の方や、近藤原理先生と会う機会は本当に少ないものです。そういった一つ一つのつなが

りを大切にすることが自分の知識を増やすこと視野を広げることにつながることを学びました。北総だけではなく障害者福祉の源流と言われる近藤原理先生のお話を聞くことができ、私たち支援をする側の「働くこと」の重要性を改めて考えさせられる講演でした。まだまだ未熟な部分も改めて感じることができ、利用者の働きに私たちが付加価値をつけるには、私自身も知識をつけなければならないと思わせられる研修でした。

⑩支援員　平塚 恵理

私が初めて原理先生にお会いしたのは昨年6月しかまち福祉実践研究会に参加させていただいたときのこと。研修の前段で原理先生と参加者一人一人が挨拶をする機会が与えられた。その時には随分と弱られていて、自分の足で歩くことも明瞭な意思疎通をはかることも叶わないような状態であった。著作や映像等を通しイメージしていた姿とは差違があった。それでも昔から見知った方や園長の顔を見ると嬉しそうに「おー」と声をだし、原理先生宅の椎茸の話が出ると目を細められていた。原理先生を慕い集う方々、長年に渡ってはぐくまれてきたなずなの結び付きの強さを肌で感じた。

今振り返るととても良い経験をさせていただけた。12月に原理先生が逝去されたことで、6月の対面が最初で最後となった。障害福祉を長きに渡り支えてきた人、なずなの教えを各地に広げた人、あの近藤原理先生に実際にお会いし、短いながらも言葉を交したことは、何物にも代え難い。

⑪看護師　師岡 小百合

私が近藤原理先生にお会いしたのは、平成27年の第27回なずな沖縄障害者教育福祉合宿研修でした。私は実践発表をさせていただきました。1日目の懇親会で初めて原理先生にお目にかかりました。原理先生を囲んでなごやかな会となりました。

2日目に原理先生の講義を聞くことができました。利用者さん同士が助け合って支えあって生活する様子を微笑ましく話されていました。利用者さんの日常の一コマを先生の視点やお気持ちを添えて話される。先生の利用者さんを見つめ生きてきたお気持ちが胸に響きました。福祉を志す者として幸せな経験をさせていただきました。しっかり御自身の足で立ち、平和の大切さも教えてくださいました。ありがとうございました。

太田川のほとり ⑬③

ちちはは

やっぱり
この子らには
まことの　ちちははが　あった
ちちが　むかえにくれば
とりすがり
ははが　つれにくれば
ないて　よろこぶ
はや　わたしなどには
ふりかえりもせぬ　子どもであった
こんな　よろこびようを
いまだかつて
わたしは　みたことがない
ああ
やっぱり
わたしは
まことの　おやではなかった

近藤益雄　詩集より

この詩は近藤原理先生の父である近藤益雄先生が書いた詩です。入所施設で支援員として働いている私にとって、この詩は「あぁ、本当にその通りだなぁ…」としみじみ感じさせられる印象深いものです。

利用者の高齢化が顕著になったということは、当然そのちちははの高齢化も指します。すでに鬼籍に入られた保護者も多い中、80歳、90歳となったちちははが「我が子の為に」と、この6月14日、15日とどくだみ採り、束ね、ラッキョウ加工の手伝いに足を運んでくれました。その背中から私たち職員は多くの学びをいただいています。

「この人たちの後ろには必ずちちははがいる。例え亡くなって天国に行った後もそれは変わらない。利用者支援に当たる時、常にこの人たちのちちははに顔向けできる仕事になっているか、その意識を持って欲しい。」武井園長がいつも私たちにメッセージする言葉です。ちちははがこの世にいない寂しさ、悲しさ、やるせなさを抱えて生きているこの人たち。私たちは親の代わりにはもちろんなれませんが、その方の親を思って心ある仕事をすることはできるはずです。入職当時20歳そこそこの私に「うちの子がお世話になって本当にありがとうございます。」と深々と頭を下げてくださったちちははに「私がすべきことは何だろう?」と真剣に考えました。先輩職員の教えも受けながら私なりに導いた答えは「当たり前のことを当たり前にする」ということでした。季節に合った心地よい衣類を着ること、おいしいご飯をおいしいねと言い合って食べること、清潔な寝具で休むこと、爪が短く切られていること、「おはようございます」「お仕事ご苦労様でした」「ありがとうございます」「おやすみなさい」心がこもった挨拶が交わされる生活。その積み重ねが少しでもちちははの安心に繋がれば…。親亡き後の我が子の幸せを願ってできた北総育成園。今こそ、その真価が問われていると思います。益雄先生の詩を心に置きながら謙虚にこの人たちに寄り添う自分でありたいと思います。

（絵鳩）

街道をゆく137

原理先生からの便り

探しまわった三日間―私の被爆体験―近藤 原理

武井　敏朗 様

この一ヶ月、深夜の執筆にうちの園生、猫、犬たちがそろって応援してくれました。楽しかったです。ガン首そろえて無口の彼たちが私のペン先をずっと見つめてくれました。終わったら以後は現れません。不思議です。

国交省と県被爆者援護課の依頼原稿です。読んでください。お元気で。

２０１５（平成27）年12月２日
近藤　原理

◇◆◇◆◇

(1) 平戸の島も戦時体制

私の教育や福祉の原点は戦争と原爆の体験である。１９４５年敗戦の年、父は38歳で陸軍に応召、母は国防婦人会の防火訓練や塩田作業に、私は中学猶興館2年13才、農家への勤労奉仕や壕掘り、それに軍事訓練に精を出していた。上級生は軍需工場へ動員され校舎の半分の空教室には船舶工兵の暁部隊が駐屯していた。春休みも夏休みもなかった。

海峡を見下ろす高台のわが家の庭先には、毎朝決まって数名の兵士がやってきて小さな壕に陣取っていた。ある日アメリカの偵察機が低空で飛んで来た。一斉に銃を構えた時、祖母が「兵隊さん撃たんでください」と叫んだ。機は操縦士の顔がはっきり判るほどの至近距離で通り抜けた。配給の米はなく夏はからだが黄色になるほどかぼちゃばかり食べていた。

基地のある大村も川棚も佐世保も爆撃され沖縄もひどくやられているらしい。本土決戦、一億玉砕。平戸島も緊迫した日が続いていた。

(2) 兄、学徒動員中進路変更、そこへ原爆が。

被爆一週間前の昭和20年8月1日、兄は学校も動員先も変えていた。それは、父、益雄の強い勧めによる。文系を志望していた兄に当時平戸高女の教員で女生徒を川棚の海軍工廠に引率、労働に従事、大村の陸軍に入隊後は熊本の山中に布陣、本土決戦に就く。そんな時勢に「文系とは何ぞや」とばかり軍隊式教育の長崎師範本部へ進路を変えさせたのだった。幾日かの入学前休暇をもらい、再度兄はワラジ履きで長崎へ旅だった。

8月1日の「随時入学」は4名。長崎港口の三菱造船所で労働をともにしていた中学猶興館の仲間だった。それが今度は海から遠い浦上教会近くの長崎師範学校へ変わったのだった。動員工場は三菱兵器大橋工場となるのだった。

米機「新型爆弾」を長崎に投下――と聞いても報道は少ないし各戸に電話があるでなし、父のいないわが家に情報が伝わるはずはなかった。いろいろ思案しているうち11日の深夜、家のまわりを何かの足音がひたひたと。戸を開けるが誰もいない。また、ひたひたと。やはり誰もいない。祖母が「兄ちゃんは師範入学前に靴を盗まれ長崎行きは藁草履だったよ。ひょっとしたら兄ちゃんの魂が帰ってきたのかも――」と言った。

(3) 兄を母と捜し歩く

そんな会話があって13日に母と私は長崎へ向かうことにした。炒り大豆と地図を雑嚢に入れ、暗いうちに朝一番の不定期船で田平に渡った。ところが汽車の切符が手に入らず炎天下歩くことになる。沢の水を飲み飲み約20キロ程先の潜龍駅でやっと超満員の列車に乗ることができた。前の年は陸軍幼年学校受験のため、吉井からは実盛谷経由の軽便鉄道に乗ったが、この年から一段と大きく速い国鉄に代わり、直谷の鉄橋もできていた。窓から空襲で焼けた佐世保や大村が見えた。

午後の早いうちに列車はゆっくりと道の尾から長崎市内に入った。浦上駅で降りた。長崎がどうなっているかほとんど状況が分からずだったが、まさに見渡す限りの広大な地獄谷だ。たった一発で何もかも壊し吹きとばしている。それまで私が理解していた一発の威力とはせいぜい直径30か40メートルの擂り鉢状の穴でしかなかった。あれは昭和17年、小学校5年生の4月、日本を初空襲した米機が中国に帰還する途中、平戸の町はずれに投下したという爆弾の穴である。担任に引率されて見学に行った日のことを思い出した。それに比べ桁ちがいの破壊力である。

長崎北部の山々は周囲というか頂上まで茶褐色に焼け、眼前に瓦礫の原が広がる。曲がった煙突、鉄骨だけの工場群、まだ火を噴いている電柱もあった。馬の死体のそばに人の死体も。幾筋も煙が上がっている。聞くと人を焼いているのだという。ものすごい高熱（落下点で４０００度）と爆風（秒速６５０メートル）はこの地を一瞬のうちに地獄と化したばかりでなく、放射能はじわじわと肉体を幾月幾年にもわたって蝕んでいく。この月だけでも７４０００人が死に７５０００人が負傷したといわれている。

松山あたりを歩き、壊れた教会の陰でひと休みしていると道ゆく人が「太陽が落ちたように一面七色に光って……」と悲惨さを語ってくれた。

新興善救護所の前を通り、兄の保証人である西山の叔父の家をたずねた。叔父は無事であった。話によると兄のいた大橋あたりが一番ひどいらしい。師範学校から「諫早海軍病院収容」の

証明をもらってあったので受け取るとすぐ長崎駅へ急いだ。外は暗くなっていた。駅といっても小屋にロウソクが一本立っているだけ。並んでいると私ぐらいの少年が「証明がないので汽車に乗れません。ぼくを家族に入れてくれませんか」と頼むのだった。聞くと水産学校の2年生で郷里に帰りたいとのこと。彼を弟にして運賃後払いの切符3枚を受け取りやっと満員列車の通路に座り込んだ。

風にのってくる死体の臭いを避けるためか、まわりの人はみな手ぬぐいかハンカチで鼻と口をふさいでいた。汽車は容易に動き出さなかった。真夜中、諫早駅に着いた。「万歳、万歳」の斉唱に振り返ると出征男性を見送る一群が見えた。これからどこかの部隊に入り戦場に向かうのだろう。

(4) 諫早、大村と探しいったん帰宅

眠れぬまま14日の朝をむかえ諫早海軍病院を訪ねた。門番の兵が名簿を調べてくれたが兄はいなかった。近くの国民学校にも行ってみた。婦人会の方がお世話していた。9日の灼熱地獄をくぐり抜けてきた人たちがたくさん収容されていた。兄の名を呼びながら教室から教室へと歩いた。

けがや全身火傷で動けない人ばかりだ。脇の下に蛆が何十何百とうごめいている人も。血染めのシャツの男はうつろな目で天井を見つめている。目鼻が判らないほど焼けた顔が「ミーズ。ミーズ」と喘いでいる。うめき声の中には朝鮮の人の「アイゴー」も聞こえる。そんな人が教室にも廊下にもあふれていた。

(5) 大混乱の中、一枚のハガキが

大村の陸軍病院にも行ったが兄の名前はなかった。あきらめて午後の列車で平戸へ向かった。車内には傷ついた人や疲れきった人でいっぱい。平戸口駅下車、そして田平桟橋から対岸の平戸中ノ崎波止場へ渡してもらい亀岡神社を通ってわが家に帰った。帰りつくと1枚のハガキが届いていた。

「前略。近藤耿君（アキラ）がけがをして諫早の国民学校へ収容されております。フトンを持ってきて下さい。

長田駅前　山田 春一」

生きている！母と私はすぐまた諫早へ向かった。今度は平戸口駅から乗車、深夜諫早駅に着いた。聞くと長田まで1里くらいとのこと。雑嚢の大豆を噛みながら暗闇を歩いた。長田校は灯火管制でまっ暗。兄の名前を呼んでまわったら、ある教室で「ハーイ」の返事。ロウソクの灯で対面したが別人だった。

(6) 8月15日　木札に涙

8月15日の早朝、山田春一さん宅をたずねた。山田さんは三菱長崎造船所の工員さんで、出勤前だったため忙しくしておられた。母がハガキを差し出すと、

「この人は10日に負傷者を運ぶとき知った人ですよ。父は応召で熊本にいるがハガキを出せば誰か来てくれるでしょうから――と頼まれたのです。翌朝どんなにしているかとおかゆを持って行ってみましたら、もう藁の上で冷とうなって…」

母も私も泣いた。長田まで生きぬき、ハガキを頼んで息絶えた兄。魂だけは11日の夜、あの足音となって帰ってきたのだ。「もう出勤時間ですから」といわれ、この人の家を出た。

駐在所で戦災死亡者名簿を調べ、涙しながら小高い丘にのぼった。「12」が兄の埋葬番号である。木の札は百近く立っていた。

冬は竹馬や罠かけ、夏は魚釣りやサザエとり、理科の実験や剣道の打ち合いと、兄との思い出は尽きない。中学5年の時は三菱長崎造船所に動員され「もう三ヶ月も海防艦の鉄の上とコンクリートの上ばかりです。はだしで草の生えた土をふみたいです。しかし勝利の日までがんばります」と家に便りをくれた兄。師範学校に入ると翌日から三菱兵器大橋工場へ動員、そして焼けただれ息絶えた兄。線香に火をつけ、「12」の木札の前に供えた。合わせた手に涙がボロボロ落ちた。

朝日があがると向こうに雲仙岳がそびえ、手前の小野海軍飛行場では「赤とんぼ」（複葉の練習機）が1機、ゆっくりと離着陸をくり返している。戦争などなかったような静けさである。

死亡診断書をもらうため丘を降りて学校近くの医院に寄った。康嘉音（ヤスカオン）という台湾出身の医師で「近藤耿　昭和三年二月一日生　昭和二十年八月十一日午前五時死亡」と書いてくれた。

山田さんのおかげで最期が判ってよかった、と母と話しながら長田校の前を通ると、また遺体が担架で運び出されていた。長田から諫早経由で家族が待っている平戸へ向かった。途中、佐世保駅で乗り換え列車を待っていると新聞号外を読んでいる人がいた。見ると大きな活字で戦争が終わったと報じていた。

それから一月あと、復員した叔父と母と私は兄の遺体を荼毘にふすため長田に向かった。父はまだ軍隊から帰ってなかった。

12番を掘ると兄らしい遺体が現れた。別れ際に送った私の革のベルトが腰のあたりにしっかりと巻かれている。まちがいなく兄だ。石油がなく近くの農家から買った薪で焼いた。容易に焼けなかった。少しばかりの骨を持ち帰った。

付記　8月9日被爆時、猶興館出身の4人は純心高女裏山で壕掘り中で、結局皆、亡くなったとのこと。

村議会だより ㉒

去る5月16日（水）、第46期北総の里村議会選挙が行われた。

今年は村長に福田さん、山本さん、渡邊さんの3名が立候補。福田さんは村長戦出馬が今期で20回目。山本さんは現職の村長として2期連続当選を狙う。いつもはマイペースな渡邊さんが初の村長当選に向けて作業や掃除にいつも以上に励む姿があった。

一方議員立候補者の顔ぶれはというと6議席に対して11名が立候補。現職議員の堀川さん・安部さん・石井さん・堀越さん・大河原さん・猪瀬さん6名が連続当選を目指しての出馬。前回落選した石毛さん、斉藤さんも凝りもせず今年も出馬。瀧波さんと日森さんは久しぶりの立候補。そして、北総に入所して1年半になる北原さんが「私、村議員やります！」と名乗りを挙げ、第46期北総の里村議会選挙の戦いが始まった。

いよいよ迎えた投票日。まずは村長戦。序盤から福田さんが票を伸ばし、途中山本さん、渡邊さんも追い上げも見せたが、序盤でのリードが決定的となり、見事104票を獲得。村長出馬20回目の節目で当選を果たした。昭和49年北総開所時のメンバーであり、園長の戦友でもある福田さん。ユーモア溢れる人柄はまさに「北総の顔」であり、村長としての活躍が期待される。続いては村議員の開票。結果は北原さんが初出馬でトップ当選という輝かしい選挙デビューを果たした。続いて実力派の堀川さん、石井さん、前回一票の差に涙をのんだ石毛さんが返り咲いた。5番手には現職大河原さんが入った。最後の1席には現職の安部さんが飛び込んだ。久々に出馬した瀧波さんは次点の悔し涙。堀越さん、日森さん、斉藤さん、猪瀬さんも善戦も及ばず。

第46期北総の里村議会が始動する。福田村長を中心に、初当選の北原さんはどんな活動をしてくれるか楽しみだ。当選した7名は議員になったがこれからの1年が大変である。北総をより良くしていく場として歴史ある北総の自治活動「北総の里村議会」が今年も活発な運営となるように全職員で支えていきたいと思う。

（余暇部会主任　菅谷 大輔）

選挙報告

第46期 北総の里村長は

福田 克三さん

▲第46期北総の里村長、村議員ここに誕生！
向かって右より村長の福田さん、村議員の北原さん、堀川さん、石井さん、石毛さん、大河原さん、安部さん。H30.5.16

第46期 北総の里・村長村議員選挙投票結果

【村　長】

当	104 票	福田克三	67歳	(元)
落	66 票	山本泰三	76歳	(現)
落	28 票	渡邊庸一	59歳	(元)

【村議員】

当	33 票	北原治子	50歳	(初)
当	26 票	堀川明美	47歳	(現)
当	24 票	石井武明	46歳	(現)
当	23 票	石毛洋平	38歳	(元)
当	22 票	大河原一男	62歳	(現)
当	20 票	安部百合子	66歳	(現)
落	次 15 票	瀧波和衛	59歳	(元)
落	11 票	堀越正明	61歳	(元)
落	11 票	日森直	49歳	(元)
落	9 票	斉藤敬子	56歳	(元)
落	8 票	猪瀬美佐子	42歳	(元)

編集後記

早いもので今年ももう半年が過ぎました。今年度初の広報紙「北総の里」となります。

昨年12月に長崎の近藤原理先生がご逝去されました。今号では特集「近藤原理先生から学んだこと」と題しまして、原理先生から学んだたくさんのことを、武井園長はじめ多くの職員が言葉にしました。

私は長く広報の編集委員を担当していますが、毎号原理先生にも読んでいただいていました。3年前、山口宇部なずな合宿に参加した際、原理先生にお会いし「絵鳩さん、広報紙は大変ですけど頑張ってください」と声を掛けていただきました。その時は舞い上がってしまって「はい！ありがとうございます！」としか言えませんでしたが、本当に嬉しくて有難い原理先生との思い出です。

「平和なくして福祉なし」「ゆとり・夢・ユーモア」「大らかに細やかにさりげなく」…原理先生から教えていただいたこの人たちを大切にする言葉の数々は、これからも色褪せることなく、私達の進むべき道を照らしてくれることでしょう。原理先生から学んだことを、自分たちの仕事にどう生かしていくか。真剣にそのことに向き合い実践していくことが、原理先生への恩返しになるように、丁寧に日々を重ねていきたいと思います。

（絵鳩）